

香川県庁舎東館の評価と香川県の動き——DOCOMOMO20 以前と以後——

	評価の要点	外部からの動き	香川県の動き
竣工時 1958～ 60年代	<ul style="list-style-type: none"> ・創作論との強い関わり ・先進的な構造設計思想 ・丹下建築の社会への定着 ・地域への良質な影響 		<ul style="list-style-type: none"> ・見学者への庁舎開放 ・南庭でのイベント（レポート・コンサート等）
DOCOMOMO20 以前	<ul style="list-style-type: none"> ・意匠中心の批評（好意的・批判的両方） 		<ul style="list-style-type: none"> ・機能の変更（議会棟・新本館の建設） ・東館継続使用の方針（新本館建設に際し）
DOCOMOMO20 選定 1999～ 2000年	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な評価へのアプロ ーチ (DOCOMOMO20 展覧会開催) 		2000. 新本館竣工
DOCOMOMO20 以後 2001 ～14年	<ul style="list-style-type: none"> ・評価の相対化（意匠・空間・歴史的属性） ・継続使用に伴う今日的な 評価 ・設計意図の再評価 	<p>2012. 12. 26. 日本建築学会による 保存活用への申し入れ</p> <p>2013. 8. 17. DOCOMOMO Japan より 選定プレート授与</p>	<p>2007. 香川県建築物耐震化推進プラン策定 (県有施設の耐震化についての事項を定める)</p> <p>2008. 香川県庁舎50周年プロジェクト（県庁職員有志での活動）→観光交流局でのまちな歩き事業</p> <p>2013. 7. ～9. 丹下健三生誕100周年プロジェクト (会長は知事、文化振興課担当、展覧会・シンポジウム・ガイドツアー)</p> <p>2013. 12. ～2014. 1. 香川県庁舎東館保存・耐震 化検討会議開催</p> <p>2014. 東館建築ギャラリー設置作業（文化振興 課担当）</p>

参考資料 香川県庁舎の評価——DOCOMOMO20 以前と以後——

1. 設計意図

1・1. 丹下健三の言葉

【丹下健三「設計者として」『香川県庁舎竣工記念アルバム』】

一つは、この建物が県政を進めてゆく上におきまして、明るく、健康的で、合理的にできますような新しい建築としての環境を作り上げていきたいということでした。

二つめは、一般県民の方々に、この県庁舎の建物が親しんでいただける、ということを非常に大きく念願していました。

この建物の下は、柱だけで何もないうち広場になっています。私はこの広場が県民のための広場であると考えたいし、またそうあることを希望して設計して参りました。その広場に繋がる庭も、県民の庭であると私どもは希望しています。

【丹下健三 1959「日本の伝統の変革」『朝日新聞』1959. 4. 21】

ジョウモン的ともよんでよい、この解放された民衆の荒れ狂うエネルギーは、徐々に文化を形成してゆくだろう。ヤヨイの伝統を否定し、破壊していく過程で、しかもそれとぶつかり合ってゆかねばならない。このぶつかりの燃焼のなかから、新しい日本の伝統は創造されるだろう。

ここ〔香川県庁舎〕ではヤヨイ的なものをのりこえようとする気持ちはより強く働いていた。(中略)ここでは鉄にかわって、コンクリートが主体になっている。その構造的な合理性のなかで、コンクリートのいのちを捜し出そうとして、ぎりぎり到達したのがこの建物であった。

1・2. 設計スタッフの言葉

【神谷宏治 1959「香川県庁舎について」『建築文化』1959. 1月号】

この庁舎の1階部分は、公衆のスペースとしてすべて開放されている。ピロティ・1階ホール・室内・庭園の3つに分れたそれぞれのスペースは、あるばあいには独立して、ある時は一体のものとして流動的に利用され、人々が気易く自由に入出入りして、集会や休息、催物が行われる所となるだろう。(中略)

これらの、1階と屋上・県庁ホールやロビーといった公共のスペースの中で人々は庁舎で事務的な用を足すだけのものを越えた、様々な生活を体験するだろう。公共的なスペースについての私達の提案は県当局の強力な支持を受け、工事の進行にともないながら県や私達のイメージは次第に成長し、より具体的なものとなっていった。このスペースは県と私達の協同の所産である。これらのスペースの持つ意義、これらを含めた庁舎全体の機能と表現——いわばこの庁舎の全体像としての意義が明らかとなるのは、むしろこれからの問題であろう。

いろいろな社会的な事件、様々のドラマがここを舞台として展開され、繰返されながら、ここに庁舎と民衆の生活的な交流の歴史として刻まれ積み重ねられて行かねばならない。そこに民衆の積極的な主体性が生かされ創られて行く時にのみ、初めてこの庁舎の全体像が明確な共通のイメージを伴ったものとして意識され、定着していくだろう。公共建築としての本来の社会的意義がこの時初めて生まれるとあってよい。今それは萌芽としてそこにある。

【坪井善勝 1966「ラーメン構造」『現実と創造 丹下健三 1946—1958』】

香川県庁舎は高層部と、低層部とからなっているが、高層部は縦、横ともに約10mの3スパンからなり、中央部1スパンが5階まで耐震壁をもったコアになっていて、6階より上は全部16本の柱をもった均等ラーメン構造であり、(中略)確かに機能的には中央部がコアになっているが、構造的にこれをコアとして取りあつかうのが是か非かはいろいろ検討された上で、はじめて決定されたものである。(中略)

通常われわれが使用している規準の計算法はある仮定の上にならざるを得ないいろいろな約束をして、体系化されているものであるから、全く新しい仮定の上に別の約束をして異なった計算法の体系を創ることは一向差支えないはずである。(中略)

許容応力で断面設計をおこなうのではなく、部材とそのものの強度から断面設計はおこなわれるべきである。いわゆる断面設計は終局強度で計算するのが妥当であるという結論に到達したのである。構造計画と断面設計は常に表裏一体のものであり、われわれは構造計画を考えている時は、常に同時に断面設計をおこなっているのである。そこで応力計算にもLimit Designが採用されたわけである。われわれがLimit Designを採用したのは、この建物が最初であるが、敢えて採用した理由は「断面設計を合理化しなければならない」ということが最大のものであった。(中略)

実施設計は鉄筋コンクリート構造になったのであるが、設計の初期には(中略)従来の多くの実例からして、当然鉄骨鉄筋コンクリート構造を想定していたのである。(中略)建物の規模からして、従来の鉄筋コンクリート構造を設計の面からも施工の面からもはるかに発展させたものと考えられた。すなわち使用鉄筋はすべて高強度の異形筋(SSD49)とし、柱、梁の主筋は直径32mm、35mmのものであり、継手は特別の場合を除きガス圧接とした。

2. 他者による評価

2・1. 竣工直後

【川添登 1959「ヒューマニズム・建築」『建築文化』1959.1月号】

香川県庁を訪ずれて、まず思ったのは丹下健三もようやく自分の言葉をものにしたという感慨だった。これまで彼は、自分の言葉を発し、創るために遮二無二闘ってきた。彼の建築言語は、あるときは不逞であり、あるときは悲劇的であり、あるときは慇懃無礼であった。しかし今、丹下が市民に親しげに語りかけている。そこにはまだ貴族的な臭みもあり、多少背のびもある。ときに饒舌な言葉も聞かれる。それらの欠点をあげる

ことは極めて容易だ。だが、ピロティの下で戯れる子供たち、ホールのベンチでひと休みしている老人夫婦、屋上でコーヒーをのみ景色を眺める幾組かの男女。そして低層部の屋上から、ふとガラスの中をのぞくと、そこで事務をとる役人たちが、この建物と溶けあっているのを見たとき、それらは小さなことに思われた。市民に語りかけられる現代建築の言葉をピロティとか、コアとか、木割りとか、庇とか縁とかを、丹下がようやく自分のものにしたということが、私の気持ちを強く捉えた。

【神代雄一郎 1960「建築家は地方で何をしたか」『建築文化』1960.11月号】

地方をまわってみて、東京の建築家がやった仕事で一番いいと思ったのは、香川県庁舎であった。地方で東京の建築家がやった仕事の良否を決定するのは、ただその建築だけが良くても駄目なので、その建築がその地方の建築を前進させるようなものであったかどうかできるのである。(中略)ここ〔高松〕でのコンクリートや石に対する理解や情熱がどんなに高まっており、地方性の獲得といったことがどれほど熱心に探求されつづけているかを知ることができる。これらに香川県庁舎の影響がはっきり見られることは、丹下のねらいが正確だったことを物語るものであり、同時に地元がそれを受けて立つほどしっかりしていたのである。極端な言い方をすれば、もはや高松は丹下を必要としないだろう。しかし高松にはいつまでも丹下の投じた一石が生きているであろう。

2・2. DOCOMOMO20 以前 1970～90年代

【長谷川堯 1972『神殿か獄舎か』鹿島出版会】

どのように美しい粉飾がなされようとも、獄舎から神殿があらわれた時に、歴史は硬直し、自由が凍結されるのは、否定できない傾向である。その事実は、「民主制」を謳う(正確にはそれはシステム・ポリティックスの原型ともいうべきだと思うのだが)、ペリクレス治下のアテネの、パルテノン神殿が建設された時代においても、全く同じであったように私は思う。(中略)

昭和33年香川県庁舎がつくられた。列柱ならぬ特色ある“列梁”(小梁)をもったこの神殿建築は、31年の国連加盟によって国際政治の場に復帰した<国家>が、国際的な外交関係における<国家>的な個性をさぐる時点において、その意図をいち早くデザインとして先取りし、木造建築の軸組的な構造と寺院や塔などの化粧極の表現を、鉄筋コンクリートの柱梁の表現にきわめてたくみに移入して出来上がった作品であった。

川添登氏はこの建築を傑作だ、と絶賛した。その彼はちょうど同じころ伝統論をもとに声高に「国民建築の創造」を叫んでいた。それは確かに国際政治場へ復帰した日本の<国家>的要請でもあったのだ。

【村松貞次郎 1977『日本近代建築の歴史』NHK出版】

鉄筋コンクリートというまったく異質の材料と構造方法をもって、いかに日本の伝統的表現を、模写でなく前向きに獲得するかは、長年の日本の建築界の課題であり宿願だったといえることができる。(中略)そうしてやっとこの建築でその宿願が果たされた。まさに近代日本屈指の名作と評する人も多かった。ピロティと平面コア、そしてピーシー・コンクリートの構成を迫及した成果だと思われる。ただこの建築の外観に城や五重塔などを連想させる垂木や小梁の突出を見て、それを日本的とするのであれば、問題がある。

構造計算のなかった昔の日本の木構造ではもっと太い部材によって鈍重なほどの比例が追求されている。コンクリートやピーシー・コンクリートの計算された強度によるこの建築の比例は軽く・薄くそして細すぎて、決して伝統的な木構造のそれではないのである。

【石田潤一郎 1993『都道府県庁舎 その建築史的考察』思文閣】

33年5月、丹下健三による香川県庁舎が完成する。(中略)この庁舎では、東京都庁舎につづいて、ピロティによる開放的なアプローチ、コミュニティ・ホールの設置、壁画(猪熊弦一郎)の活用といった手法を組み合わせ、シティ・ホール性を徹底的に追求している。都庁舎では批判も多かったが、ここでは好評をもって迎えられた。意匠的には、四周にベランダをめぐらし、キャンティ・レバーの梁を木造的にあつた造形が絶賛に近い評価を受けた。(中略)香川の成功ののちには、ベランダは、庁舎はいうにおよばずオフィス・学校・病院建築などで汎用されるにいたる。

【山本忠司 1994「特集：近代建築の保存・再生 その現状と展望 香川県庁舎」『建築雑誌』第109輯第1365号】

現代建築に限らず建築の機能は、時間の経過とともに変化していく。それに対応し切れなくなって、その生命を放棄せざるを得なくなる建築も多い。そのような中で、香川県庁舎のピロティとこれに続く南庭のスペースは、時間とともに生き、ますますその価値を増幅しつつあるようで、そのほかの若干の機能上の欠点を補っているようである。

このたびの香川県庁舎の建替えに当たっては、全面移転か、現地での建替えかと意見が分かれたが、結果として現地主義が採られ、この建物はそのままの形で残し、改築後もやはり庁舎本館として存続させるという結論に達した。(中略)

昭和33年に竣工した香川県庁舎は、21世紀へ向けての新しい時代、延面積も8万㎡に及ぶ巨大な規模となったが、丹下氏設計の旧香川県庁舎は、やはりその中核的施設として位置づけられ、存続していくことが決定づけられた。

ここで、なぜこの庁舎が生き延びることとなったのか、その要因について考えてみたい。

それは、この庁舎が戦後の混頓とした時代に起こった伝統論の締めくくりとなった建築で、その時代の思想とか背景を的確に表現していること。さらにデザインの質の高さ。また、手仕事の良さ。おそらくは、われわれはもうその時代には帰れない文化史的価値。そのうえ、例えばピロティに見られるように、都市空間の中で時間的経過に耐え得る計画的先見性などが挙げられようか。

2・3. DOCOMOMO20 以後 2001～14年

【藤岡洋保 2000「香川県庁舎」『文化遺産としてのモダニズム建築展』】

1950年代、60年代の、都道府県庁舎建設ブーム、伝統表現への関心、建築家と芸術家との協同などを象徴する建物であり、丹下健三の代表作のひとつでもある。全体を事務棟と議会棟の2つのヴォリュームに大別し、それぞれを高層棟、低層棟として構成している。また、その2棟に囲まれるように庭園を配したが、道路から庭園への空間的連続性を考慮して、低層棟をピロティで持ち上げている。ピロティなどによって市民のため

の空間を積極的に用意するというのがこの時期に重視された設計法で、この建物でもピロティや、議会と県民ホールとの間に県民と議員共用のホールを設けている。事務棟は正方形平面で、中央にコアをとり、そこに水平力を分担させることによって、外周部をすべて開放するとともに、外周部とコアの間にまったく柱や壁のない事務スペースを可能にした。

このような構造設計のおかげで、柱が独立して建つというイメージが実現されたが、当時はそれを日本の昔の木造建築（たとえば五重塔）の木割を継承したものと見て、伝統表現の好例としても評価された。なお、コアの1階部分には猪熊弦一郎が壁画を製作した。現在、新行政棟が隣に建設されており、一部改修が行われた。

【藤森照信 2003『丹下健三』新建築社】

鉄筋コンクリートのモダンな建築で、これほど日本の木造建築の伝統美を生かしたものもないだろう。まず、石柱を連想させる丸柱ではなく、木の柱に一般的な角柱をつくり、それを梁と組み合わせて、木造に由来する軽快な柱梁の架構を生む。仕上げの肌は素木同様に打ち放しのままとする。張り出すヴェランダには縁側につくがごとく勾欄を回し、軒の垂木のような小梁を出す。

そしてこうした木造の伝統と通底するつくりは、そのままモダニズムの主張にも重なる。柱梁の構造をそのまま表現としても見せ、構造材料は仕上げをせずにむき出しにする。構造美、素材美の演出。ヴェランダは、日照調整のためのルーバーと働きは同じで、機能的造形。

丹下は日本の木造の美質を、鉄筋コンクリート造に移し替えることに成功した。それも、高層の公共建築において、ル・コルビュジエ流の力強さを保ったまま。ピースセンター、いや正確には大東亜コンペ以来の丹下の試行錯誤はひとまずここに終着する。昭和初期に多くのモダニストが気づき、考え、悩まされたモダニズムと木造の伝統の関係、モダニズムと記念碑性との関係、この長く重たい時にトラウマのごとき関係は、丹下の香川県庁舎によって解決を得たのである。

香川県庁舎の出現は、自治体庁舎のあり方に決定的に影響を与え、以後、平面計画における“ピロティ”、“高層+低層”、表現における“打ち放しコンクリート”、“柱梁”、“勾欄付きヴェランダ”は、戦後民主主義にふさわしいものとして全国の自治体庁舎の定番と化していく。(中略)丹下の手になる幾多の名建築のなかでも、ビルディングタイプとなり得たのは香川県庁舎だけである。

【松隈洋 2013「丹下健三と地方性」『丹下健三 伝統と創造 瀬戸内から世界へ』美術出版社】

香川県庁舎では、清水寺や五重の塔にヒントを得て、コンクリートの庇を周囲に廻らし、雨のかからない縁側をモチーフとした造形を試みていく。また、金子正則知事という顔の見える依頼者から、香川の気候風土にあること、民主主義の時代に相応しい空間性をもつこと、既存の庁舎との整合性を図ること、など、具体的な設計条件が提示された。さらに広島ピースセンターで実績を積んだ道明栄次らスタッフと、丹下チームの設計をサポートする体制が山本忠司ら県の内部で編成されたことも大きかった。こうして、丹下の建築にとって、おそらく初めて、記念碑性が、現実の中へ確かな形で着地することができたのである。それは、丹下の求めた記念碑性が地方性を獲得した瞬間だったのである。

だと思う。そして、だからこそ、香川県庁舎は、風土に馴染み、市民と共に歩む日常性を生み出すことができたのだ。(中略)香川県庁舎は、数多い丹下健三の仕事の中で、地方性へと開かれた造形が高い密度で結晶化した稀有な建築として、これからも生きていくに違いない。

【丹下健三生誕100周年プロジェクト 県庁舎ガイドツアー アンケート意見】

子どもの頃からあたり前のようにあった建物なのに知らないことばかりで驚きました。うどん以外何もない、アートで売り出したのも最近のこととっていたけど、実は地域に根づいていたことを知れて良かったです。(県内/30代/女性)

大胆なボリューム感のある建造物を間近で拝見でき、感激です。細やかなデザインと開放感のある空間の中でお仕事をされているのは羨ましいです。(滋賀/40代/不明)

このような県庁舎というと、どうしても無機質な建物になってしまいがちだと、思うのですが、当時の県知事の時代を先読みする力もさることながら、それを最高の形で表現した丹下さんのすごさを改めて感じました。ビジョンって大切だ。(岡山/40代/女性)

“開かれた庁舎”というのがとても印象的でした。庁舎は税金で建てられるので、どの市民にとってもほっとする場所、安心する場所がよいと思います。(岡山/20代/女性)

55年たっているとは思えない。きれいです。(県内/60代/男性)

建築のすばらしさはもちろん、県全体で県庁舎を大切にメンテナンスしている姿勢に心打たれました。これからも継承して頂きたいと願います。(東京/50代/女性)

壊すのは簡単ですが、維持しつづけるのはたいへんなことと思います。ただ、香川はじめ日本全国、また世界から愛されてゆけば、きっと在りつづけると思うので、がんばってください。(東京/30代/女性)

参考：DOCOMOMO20

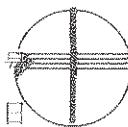
DOCOMOMO とは、Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement（モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織）の略称。1988年の設立で、現在の本部はバルセロナ（スペイン）。54カ国に57支部があり、日本支部は、1997年に準備活動に入り、2000年に正式承認された。各国で現存するモダン・ムーブメントを示す建築を20件選定するように本部から要請されたのを受け、日本では1998年にワーキング・グループが作業を開始し、1999年に選定・発表された。選定された物件は、以下のとおり。

- ①一連の同潤会アパートメントハウス（東京都、設計：同潤会、1926～34年、取り壊し）
- ②住友ビルディング（大阪府、設計：住友合資会社工作部、1926年）
- ③聴竹居（京都府、設計：藤井厚二、1928年）
- ④小菅刑務所・管理棟（東京都、設計：司法省営繕課（蒲原重雄）、1929年）
- ⑤東京中央郵便局（東京都、設計：逓信省営繕課（吉田鉄郎）、1931年、一部現存）
- ⑥土浦亀城自邸（東京都、設計：土浦亀城、1935年）
- ⑦慶応義塾幼稚園（東京都、設計：谷口吉郎＋曾爾中條建築事務所、1937年）
- ⑧宇部市民館（山口県、設計：村野藤吾、1937年、重文）
- ⑨八勝館御幸の間（愛知県、設計：堀口捨己、1950年）
- ⑩神奈川県立近代美術館本館・新館（神奈川県、設計：坂倉準三、1951年：本館、1966年：新館）
- ⑪コアのあるH氏のすまい（東京都、設計：増沢洵、1953年）
- ⑫神奈川県立図書館・音楽堂（神奈川県、設計：前川國男、1954年）
- ⑬秩父セメント第2工場（埼玉県、設計：谷口吉郎＋日建設計、1956・58年）
- ⑭広島ピースセンター（広島県、設計：丹下健三、1955年、重文）
- ⑮日土小学校（愛媛県、設計：松村正恒、1958年、重文）
- ⑯香川県庁舎（香川県、設計：丹下健三、1958年）
- ⑰群馬音楽センター（群馬県、設計：アントニン・レーモンド、1961年）
- ⑱国立屋内総合競技場（東京都、設計：丹下健三、1964年）
- ⑲大学セミナー・ハウス（東京都、設計：吉阪隆正＋U研究室、1965年）
- ⑳パレスサイドビル（東京都、設計：日建設計（林昌二）、1966年）

2003年に80件加えられ100選となり、その後追加されて2013年現在、164件選定されている。

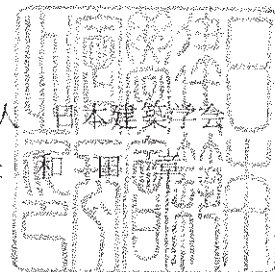
建学発 2012-第 0152 号

2012年12月26日



香川県知事 浜田 恵造 殿

一般社団法人 日本建築学会
会長 和田 隆雄



香川県庁舎東館（旧本館）の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、香川県庁舎東館につきまして、公共建築の耐震性向上の要請に応えるべく、貴庁内にて検討を重ねておられる由、うかがっております。

本会は、世界的なモダニズム建築の保存顕彰団体である DOCOMOMO International の活動の一翼を担うべく、1998年に DOCOMOMO 対応ワーキンググループを結成し、1999年以降、DOCOMOMO JAPAN としての保存再生を進めるべき建築作品を順次選定しておりますが、香川県庁舎東館はその最初の 20 作品の一つに選ばれた建築であります。

本建築は、前庁舎が戦災を被ったあと、1958年（昭和 33）5月に建築家丹下健三の設計で竣工した作品であります。戦後民主主義を具現化した明快な平面計画と、日本の伝統建築を連想させる卓抜な意匠によって、今日に至るまで揺るぎない評価を得ております。その建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、日本の戦後建築を代表する作品としてかけがえのないものであります。また、建設後 50 年以上を経過して、すでに県民の記憶のよすがとして、また高松市の景観要素として、特別な意義を有しております。

貴県が貴庁舎東館の維持管理に十全な配慮を払ってこられたことは、深く尊敬するところであります。貴下におかれましては、この建物の有する高い文化的価値と歴史的意義について、改めてご確認いただき、貴庁舎東館の保存活用を図るための方途を積極的にご検討くださいますようお願い申し上げます次第です。

なお、本会はこの建築の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

一般社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 伊藤 毅

香川県庁舎東館（旧本館）についての見解

1) 建物の概要

香川県は1888年（明治21）の置県後、1894年（明治27）に庁舎を新築し、以後長く使用してきたが、1945年（昭和20）に空襲を受けて焼失する。同県は1951年以降、高松市番町4丁目1-10に延べ約8,600㎡の事務棟を建設してきたが、1954年にいたって、その最終段階として県議会議場・県民ホールなどを含む本館の新築を計画する。これが現在の香川県庁舎東館である。その設計者には、丸亀出身の画家猪熊弦一郎の助言から設計者として丹下健三（丹下健三計画研究室）が選ばれた。

1954年末に設計の依頼を受け、翌55年1月から同年6月までを設計期間とし、同年12月に起工、1958年5月に竣工を迎えた。構造設計は坪井善勝、家具設計は剣持勇が担当し、高層部1階壁画は猪熊弦一郎の原画による。協同監理には香川県建築課があたった。施工は大林組である。

建築物の概要は以下のとおりである。敷地面積は既存庁舎分を含み18,183㎡。建築は道路側に沿ってピロティで持ち上げられた低層部（鉄筋コンクリート造地上3階建）の後方に高層部（鉄筋コンクリート造地階および地上8階、塔屋3階建）と南庭が配置される。高層部の延床面積は8,942㎡、低層部2,407㎡、渡り廊下・地下室を含めた延床面積は12,066㎡である。

竣工後、大きな改変なく今日に至っているが、既存棟部分は1997年及び2000年に丹下健三・都市・建築設計研究所によって改築されている。

竣工時には主要な建築雑誌がこぞって写真・工事概要を掲載しているが、作品集である『現実と創造 丹下健三 1946—1958』（丹下健三・川添登編著、美術出版社、1966年）の記事がもっとも詳しく、ここでは同書によった。丹下健三・藤森照信『丹下健三』（新建築社、2002年）181～185頁に建設経緯が詳述されており、また『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号（2011年）に関係者へのインタビュー記録と新資料に基づく設計プロセスの考察が掲載されている。

2) 歴史的価値

①建築意匠上の価値

意匠上の価値は、さらに、都市デザイン的な価値と、立面構成における価値の2者に分けられる。

都市デザイン的な価値とは、旧高松駅前通りに沿った敷地前面に沿って配置した旧本館低層棟をピロティで持ち上げ、背後の旧本館高層棟の1階、さらに南庭までが一体となって県民広場を構成するところを指す。そもそも丹下健三の作品の特徴は、単体の建築のみを扱うのではなく、都

市デザイン的手法を取り入れて外部空間の創出をテーマにする点にある。本建築では、前面街路の歩道からピロティ下の広場、高層棟1階の開放的なホール・県民室などの公共スペース、南庭と連なる公共空間が、新しい県民のコミュニティの場として実現している。それは1951年の第8回CIAM（近代建築国際会議）で提唱された「都市のコア」概念を具体化したものであり、都市デザインの潮流において国際的にも貴重な作例と位置づけられる。

立面構成における価値とは、日本の木造建築の伝統を継承する外観意匠をいう。鉄筋コンクリート構造の柱梁を露出し、外周に沿って庇・ベランダを廻らす。ベランダ下面には小梁を並べ、縁先には高欄を配する。ベランダ下面の梁は大梁・小梁とも梁幅を極度に小さくして、木造建築の垂木を連想させる。高欄も出隅で端部の一方を伸ばして角柄のような納まりにする。木造建築の伝統美を鉄筋コンクリートで再生したデザインとして、絶賛されてきた。

②ビルディング・タイプとしての評価

地方自治体の庁舎建築は戦前期には権威主義的なデザイン・平面になりがちだったが、戦後には民主主義国家にふさわしい庁舎のあり方が模索されることとなった。丹下健三は東京都庁舎（1957年竣工）ですでに「シティ・ホール」の概念を提示して、開かれた庁舎を試みていた。本建築では、先に見た都市デザインの観点と表裏一体となって、より明確なかたちで内外の連続性が獲得されている。高層棟1階をすべて公共スペースとするほか、低層棟2階に大会議室、塔屋には喫茶室・展望台が設置されて、建築と県民の交流が実現できている。さらに高層棟の鮮烈な印象を与えるデザインも加わって、戦前までの歴史様式によるモニュメント性とは異なる社会的なモニュメント性を付与することに成功した。これによって本建築は戦後民主主義を的確に空間化した建築という評価を不動のものとしている。

③技術史的観点からの評価

本建築の高層棟は正方形平面をなし、中央部に構造体とサービス・交通部門・設備配管を集めたセンターコア・システムを採用している。これによって外周部の執務スペースでは丹下健三のいう「無限定空間」が実現し、機能の変化に合わせうるフレキシビリティを確保できている。またそこでのサッシ・家具配置・パーティションの合理的配置のためのモジュラー・コーディネーションが徹底的に追求されていることも建築計画学上、重要である。

一方、構造設計においても、同僚の坪井善勝によるリミット・デザインによって、鉄骨を用いない鉄筋コンクリート構造で9.9m×11.7mの長大スパンを実現し、意匠にも予算的にも貢献したことは特筆すべきである。

県知事として設計を依頼した金子正則は、新庁舎に「香川の気候風土、高松の環境に合うこと・民主主義時代の県庁舎として相応しいこと・高松の都市計画上プラスになること」を望んでいた。また丹下健三は竣工記念アルバムで「1つは、この建物が県政を進めてゆく上におきまして、明るく、健康で、合理的にできますような新しい建築としての環境を作り上げていきたいということでした。2つは、一般県民の方々に、この県庁舎の建物が親しんでいただける、ということ非常に大きく念願していました。この建物の下は、柱だけで何も無い広場になっています。私はこの広場が県民のための広場でありたいと考えたいし、またそうあることを希望して設計して参りました。また、その広場に繋がる庭も、県民の庭であると私どもは希望しています」と語っている。

ここまで見たように、本建築は都市デザイン・建築意匠・建築計画・構造設計の各面において、画期的な成果を挙げた作品であり、そのことによって上に挙げた知事と建築家の願いを十全に実現したのである。本建築の影響は海外にも及んでおり、戦後日本が生んだ世界に誇りうる名作と評していささかも過言ではない。